君は曲線が織りなす風景を見る旅に出るだろう

あるとき私は、地図の中のゲジゲジなるものと戦っていた。土中の虫が這ったあとに残した、光る痕跡のようでもある地図の等高線を、ひたすら描きつづけることが私の毎日の仕事であったから。

しかし、苦痛ではなかった。それは、私が子どものころから見つづけてきた、空高く浮遊する「飛ぶ夢」の延長であった。家の裏山の段々畑から、ふんわりと飛び出す。

胸をそらせ、手を広げ、風を感じながら体は鳥になる。浮遊する中で脳裏に焼きつけたそのときの地形を、いま目の前の紙に描きつづけている錯覚があった。立山・黒部を、四国石鎚山を、そして三陸海岸近くの山々を、飛行機から撮影した写真を図化機と呼ばれる機械を用いて、黙々と描く。四〇センチ四方ほどの地図一枚を等高線で埋めるのには、どんなに早くても一月はかかった。そのとき技術者は、見えるままを描かない。地球は素顔を見せていないからだ。

湿潤な気候の下にある日本の大地は、多くが緑のマントで覆われている。地図技術者は、樹木下の素顔をあらゆる手段で感じ取り、谷を探し、尾根をたどり、等高線を描く。

描かれた素の等高線は、大地の真形を探究しようとする技術者をしても、ゲジゲジ状態がひどい。私たちは、その等高線を大地にふさわしいものへと化粧する。

谷は尖鋭になり、尾根は丸みを帯び、大きく流れを変える谷合には強い尾根がせまる。蛇行する河川周辺には河川堆積物がつくる高まりが散在し、急峻な谷が急激に開けるところには扇を広げたような傾斜が広がる。カルスト台地には凹地が数多く存在し、ゆるやかな海浜には小さな高まりが海岸線と並列をなす。

このような大地のあるべき姿を思い浮かべながら、美しい曲線

あふれる地図へと変貌させる。

やはり、地図一枚を成すのに一月はかかる。

その、技術者の苦労を重ねてつくられた地形図の等高線が、一般利用者には、ほとんど利用されていない。

民間地図のほとんどすべては、国や地方自治体がつくる等高線でびっしり埋まった地図をベースにしている。だが、山歩き用の一部の民間地図をのぞき、多くは等高線を捨てている。

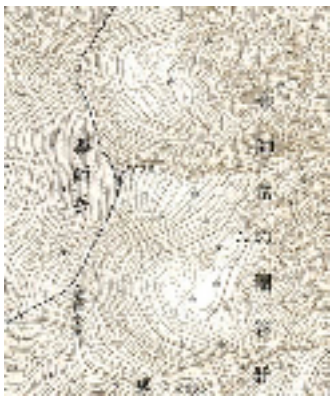
もちろん、街歩きをする者に等高線は必要としない。第一、これを正しく読める人も少ない。

「等高線はいらない」「等高線は読めない」としても、精魂かたむけて描き上げた地図の中のゲジゲジなものが捨てられることを、かつての地図の作り手はモッタイナイとも思い、残念でならない。

等高線を読んで行動しなくてもよい、等高線から地形が思い浮かばなくてもよい。ただ、地図を広げて、「自然が作り出した大地は、それを表現した等高線はなんと美しいのだろう」と感じてほしい。

散在する山々の高まりは、黒緑色をして海坊主のように起立しているのだろうか。神の手がすくいとったような曲がりをもつ斜面の夏は、可憐な草花があふれる楽園なのだろうか。

空想をはたらかせて地図を広げるうちに、君はきっと、「この美しい曲線が織りなす風景は、どのようなものだろうか」といって旅に出るだろう。



国土地理院発行　二万五千分の一地形図
「七ツ森」（上）と「薬師岳」（下）